

ボート競技が行った遠漕についての研究

古城 庸 夫*

要 約

ボート競技の各団体が行ってきた、遠漕という宿泊を伴った漕艇訓練の詳細についてはあまり知られていない。近年になって各団体や社会人の端艇部・漕艇部・ボート部と呼ばれているボート競技団体が、創立100周年を迎えるにあたり、記念誌を発行するようになった。

しかし、それぞれの記念誌の中で遠漕に触れてはいるが、数種類あったと思われる遠漕について全体的な記録としては残っていないことから、既存資料の検証と遠漕年表の作成と新しい資料の発見により、ボート部の遠漕について新たな発見がもたらされたといえるだろう。

キーワード：端艇部、ボート部、艇庫、遠漕、漕艇訓練、利根運河

はじめに

平成22年(2010年)は千葉県北部の野田市・流山市・柏市と接しながら利根川と江戸川を結ぶ利根運河(約8km)が、明治21年(1888年)5月から始まった開削工事によって、明治23年(1890年)6月16日に運河竣工式が行われ完成を見てから通水120年を迎えた。

民間資本によって作られ多い時で年間約33,000艘⁽¹⁾の通行があったとされている利根運河は、やがて鉄道の完成や台風被害によって打撃を受け、昭和17年(1942年)国有化され、現在では運河の役割を終えている。

しかし役割を終えた利根運河はかつて蒸気船や筏あるいは運搬船以外にも、隅田川に在った学校や会社の端艇部(ボート部)が遠漕と称し、宿泊を伴い訓練の一環として通行していたという事実は意外に知られていない⁽²⁾。

本研究ではそれら旧制の大学及び高校と会社の

端艇部(ボート部)が、明治期から行っていた遠漕の種類と航路及び時代背景を明らかにすることによって、ボート競技と遠漕航路周辺の人々とのつながりを明らかにすることを目的とする。

1. 初めての遠漕が行われた時代背景

隅田川でボートが漕がれるようになったのは明治10年(1877年)頃で、東京外国語学校(現東京外国語大学)の学生たちが拠金して造った2隻のボートは、学校の統廃合によって東京大学予備門と東京商業学校(現一橋大学)に受け継がれていった⁽³⁾。

明治11年(1878年)11月16日に外国人で構成された東京漕艇倶楽部が、大橋と永代橋間で秋季競漕会を行うと、それに刺激を受けたように明治13年(1880年)体操伝習所(現筑波大学)が就業の余暇に操櫓法を練習し、明治15年(1882年)3月14日には石川島造船所に茗溪・昌平の2艇の建造を依頼した。

また同年11月21日には隅田川で海軍水兵の競漕が行われると、明治16年(1883年)6月には東京大学の学生たちが東京師範学校付属体操伝習所にボートレースを申し込み初めての対校戦が行

2010年11月26日受付

* 江戸川大学 経営社会学科スポーツビジネス研究所准教授
スポーツ近代史、コーチ学

われ体操伝習所が3戦全勝した。宮田勝善（ボート百年）によれば、東京大学の敗因は捕鯨船の古いボートを使用していたからだとし詳しい原因は分からないと述べている。

今日では学校体育の父と呼ばれるアメリカ人のリーランド博士（George・Adams・Leland）⁽⁴⁾が明治11年10月（1878）体操伝習所教員となり東京女子師範学校生徒に新設体操術を指導したり、東京師範学校生徒に新設体操術を演習させたりした。

さらに体操伝習所生徒に体育の理論と実際の指導を行ったが、後にリーランド博士の通訳となり体育の指導を行うようになった坪井玄道が後にリーランド博士の指導を元に著した戸外遊戯法・一名戸外運動法⁽⁵⁾の第21という箇所には操櫓術として、明らかに日本の和船で使用する櫓の操縦方法ではなく固定席艇⁽⁶⁾で使用するオールと艇の運用方法について述べられており、その元になった本がイギリスのロンドンで出版されたことが書かれていた。つまり指導者のいない状態で漕いでいた東京大学の学生に対して、どのような形態で指導されていたのかは判明していないが、体操伝習所の学生は正式なボート競技の指導書を使用して教授されていた可能性がしめされた。

またボート百年で琵琶湖の大鯰と称されていた京都大学教授大國寿吉博士（明治18年・1885～昭和24年・1949）が、ロンドンの新聞にボート競技関係の書籍を求めていると広告を出すなどして海外から収集した膨大なボート競技関係の書籍が、没後京都大学図書館に寄贈され大國遺愛文庫として保存されていたという事実が、日本漕艇協会機関誌（漕艇・昭和30年～昭和33年）により判明した。

また寄贈された書籍のリストには戸外遊戯法の出版以前にロンドンで発行された、(boat Racing; Or, The Arts Of Rowing And Training・明治9年1876・発行ロンドン)というタイトルの書籍があり、現物貸借し内容を調査したところほぼ坪井玄道たちが訳した本であろうと推察された。

さらに詳細な調査を続けなくてはならないが、

日本におけるボートレースの嚆矢といわれる東京大学と体操伝習所がおこなったボートレースの勝敗の原因は、艇の新旧だけに依らず、体操伝習所の学生がうけたローイングの技術指導によって東京大学の学生たちが敗北を喫したという仮説と、この指導書の存在が日本のボート界に与えた影響の大きさはさらに調査の必要があると思われる。

また日本の陸上競技とボート競技の父と呼ばれるF・W・ストレンジ（Frederick・William・Strengé）の指導で陸上競技を始めていた東京大学の学生達が6月16日に陸上競技会を開催すると、明治17年（1884年）10月17日に東京大学のボート好きの学生団体である走舸組⁽⁷⁾が隅田川で競漕会を実施し、多くの観客が見物のために押し掛け、以後隅田川では海軍と学生によるボートレースが大変な人気を呼び、海軍の軍人たちは学生のボートレースの役員を務めるなどの協力体制を取った。

明治26年（1893年）3月20日、元海軍大尉の郡司成忠が千島列島探検に5隻（カッター一隻・ピンネース2隻・和船2隻・オール漕ぎ帆走兼用艇）の短艇で向島から漕ぎだすと、東京大学、高等中学、尋常中学、日本中学、共立学校、学習院、商船学校、慶応大学、改玉舎、日本銀行、三菱会社などのボート数十隻が水上から見送り、同年には三菱、日本郵船、三井、日本鉄道による初めての会社対抗ボートレースが行われた。

また明治28年（1895年）には琵琶湖の天津で第一回大日本連合競漕会が行われると、東京から大学や会社のボート関係者が選手や役員として参加するなど、日本国中がボートレースという新しい西洋スポーツに夢中になって行ったと思われる。

そのような社会的状況の中で初めての宿泊を伴った長距離の漕艇訓練が一橋大学端艇部によって行われたのは、明治31年（1898年）1月のことで、航路は隅田川艇庫～荒川～江戸川～利根運河～利根川を経て銚子の大新旅館に向かった。

また銚子遠漕が行われた理由は、長距離を漕ぐことによって漕艇技術及び体力の向上を図りつつ、隅田川の見慣れた風景を離れ気分転換を行いながらクルーとしての一体感を強めようとする狙

いもあった。⁽⁸⁾

2. 明治期の隅田川における艇庫建設

明治17年(1884年)以降、隅田川でのボートレースが盛んになり、多い時では一月に十数回の競漕会が行われるようになっていった。

それまで浅草橋の野田屋という貸しボート屋や、築地の小林という船宿にカッターやバッテリーなどという船を預け、各学校から学生達はボートソングを歌いながらオールを担いで徒歩で隅田川に向かっていったが、明治20年(1887年)4月16日に帝国大学の向島艇庫が完成すると、明治45年までの間に13団体によって続々と艇庫が建設され新艇の造艇ブームが引き起こり、隅田川の吾妻橋を中心にした一大ボート文化圏が形成されていったが、それらの様子は写真が高価な時代だったことと明治維新で職を失った絵師たちにより錦絵や版画として残されており、その当時の人気ぶりを今に伝えている。

	和暦	西暦	団体名
1	明治20年	1887	帝国大学(東京大学)
2	明治25年	1892	学習院大学
3	明治27年	1894	旧制第一高等学校
4	明治30年	1897	高等商業学校(一橋大学)
5	明治33年	1900	東京高等工業高校(東京工业大学)
6	明治33年	1900	東京外国語学校(東京外国語大学)
7	明治37年	1904	早稲田大学
8	明治39年	1906	日本銀行
9	明治39年	1906	東京高等商業学校(一橋大学)
10	明治40年	1907	明治大学
11	明治40年	1907	慶応大学
12	明治42年	1909	東京高等師範学校附属中学(筑波大付属)
13	明治45年	1912	大倉高等商業学校(東京経済大学)

図1 明治期における艇庫建設

3. 大正10年頃の寺島地区の艇庫群

明治45年(1912年)頃には隅田川の吾妻橋を中心として、下流に第一高等学校と東京高等工業学校の2校と上流に10校と一実業団の艇庫が完成し艇庫村と呼ばれた。

この艇庫村と総称された隅田川で行われていたボート競技は艇庫に合宿所を併設していた関係で、他スポーツの合宿所とは一味違う各ボート団体が隣り合った密接な相互理解と相互扶助の精神を涵養する一大スポーツ団体を生むことになっていた。

そしてそのような良好な関係は、ボート競技が他競技に先駆けて大正9年(1920年)日本漕艇協会を設立したことにつながった。

このことは大日本体育協会の第2代会長に東京大学出身で、第1回競漕大会でボート選手として優勝経験のある岸清一⁽⁹⁾が就任したことと密接な関係があると思われる。

この極めて純粋なオアーズマンシップ⁽¹⁰⁾はボート部を卒業し社会人となってからも相互扶助の精神として今日まで受け継がれている。

大正10年頃になると下流にあった2校の艇庫が上流へと移転したため、長命寺のわずか上流にあった東京商科大学(一橋大学)・東京帝国大学・第一高等学校(元日本銀行艇庫)の艇庫群が最下流となった。

新たに上流に建設された艇庫と他団体に譲渡された艇庫は、以下の六つである。

	和暦	西暦	団体名
1	明治40年	1912	慶応大学~日本郵船 譲渡
2	大正3年	1914	慶応義塾大学寺島地区へ移転
3	大正中頃	不明	日本大学
4	大正8年	1919	静水会艇庫建設(東京海上スポーツ財団)
5	大正9年	1920	千葉医科大学(千葉大学)
6	大正10年	1921	学習院大学~早稲田高等学院 譲渡

図2 新たに建設された艇庫及び譲渡先

こうして、言問団子の上流にある現一橋大学艇庫の川上には、13団体の艇庫と競技用ボートも

作成していた造船所も加わった 18 の団体で、明治期よりもさらに濃密なオアーズマンシップが形成されていった。

4. 昭和 13 年の艇庫所在地

これまで隅田川における各ボート競技団体の艇庫はその所在が知られていたが、各競技団体の詳細な住所は知られていなかった。

それは昭和 39 年の東京オリンピックのために、用地買収の容易さから隅田川堤防（墨堤^{ぼくづい}）の上に首都高速道路建設が決定されたことにより、艇庫が移転されたことと関係があると思われる。

また各競技団体が移転を考えるようになった事は、折からの高度成長時代に伴う隅田川の悪臭を伴った汚濁が一層進んだため練習に支障が出る事が多発したと無関係ではないと考えられる。そこで各競技団体は、昭和 15 年に開催が決定され後に戦争のために返上された東京オリンピックの漕艇競技会場と荒川の洪水防止のために建設された埼玉県戸田漕艇場へと移転していくが、その時の移転騒ぎで貴重な書籍及び資料が大量に廃棄されてしまったことも原因の一つであると考えられる。

またそのような事情から、各競技団体が発行する記念誌にも各艇庫の住所は記載されていない例が多かったが、平成 21 年（2009）住所等を示す資料の発見により住所が判明した。それは昭和 13 年（1938）に日本漕艇協会編集部から印刷発行されたボートマン手帳（皇紀 2598）という小雑誌であり各競技団体の隅田川艇庫の所在地が記載されていたからである。さらに手帳には大正 9 年（1920）に他競技に先駆けて設立された日本漕艇協会が定めた規約の記載が発見された。

第一章総則・第二章資産及出資方法・第三章役員・第四章評議員会・第五章附則

さらに日本漕艇協会競漕会規則・日本漕艇協会審判規則・日本漕艇協会役員住所・インターカレッジ加盟校名と艇庫住所及び連絡先の記載が認められた。

隅田川の向島地区から見て上流左岸に位置した団体と艇庫は上記の 11 団体であるが、ウラノク

ラブは学習院大学の艇庫所在地にあった。しかしこのウラノクラブはメンバー構成が学習院大学の水上部（ボート部）の部員以外も加盟して活動していたので、別団体とした。

昭和 5 年・日本郵船株式会社	東京市王子区堀船町 2 丁目 131 番地
大正 10 年・拓殖大学(後廃部) 後譲渡・巣鴨高等商業学校	東京市王子区船方町 以下不明
大正 11 年・学習院大学 ウラノクラブ (11)	東京市王子区堀船町 2 丁目 175 番地
不明・巣鴨高等商業学校	東京市荒川区 5 丁目 荒川遊園地
昭和 6 年・日本医科大学	東京市荒川区尾久町 8 丁目 1295 番地
昭和 7 年・旧制第一高等学校	東京市荒川区尾久 8 丁目
不明・東京ローイングクラブ	東京市荒川区尾久町 8 丁目
大正 14 年・東京工業大学	東京市荒川区尾久町 8 丁目 2780 番地
明治 33 年・東京文理科大学 (現筑波大学)	東京市荒川区尾久町 8 丁目 2784 番地
昭和 11 年・三菱養和会	東京市荒川区尾久町 8 丁目 2787 番地

図 3 昭和 13 年 隅田川尾久地域の艇庫所在地（浅草寺側）

また当時の大学に付属する旧制中学校・高等学校にもボート部があり、大学の艇庫を借用して練習をしていた状況があったが、それらは大学の艇庫所在地に統一した。またこの地域は一番最初に建設された高等師範学校（現筑波大学）を中心にして、下流にあった東京工業大学等が移転してきたことと、向島地区に艇庫がない団体が新しく艇庫を建設したことで生まれたものであろうと思われる。さらに高等師範学校は入学生数の増加で学校所在地が明治 33 年ごろより神田から大塚地区に移ってきたことが、上記住所に艇庫を建設した理由と思われる⁽¹²⁾。

当時隅田川の向島地区や寺島地区に練習のため移動するには、渡船か橋を渡っていかなければならず、非常に時間がかかり効率が悪かった事も荒川区尾久町に艇庫が建設された原因と思われる。さらに現在はボート部が廃部となり拓殖大学 100

年史にも記載がないため拓殖大学ボート部の詳細は明らかになっていないが、拓殖大学にボート部が誕生し尾久地区に艇庫を求めたのも、校地の近くに東京師範学校が移転してきたことで学生のボート熱に影響を与えたからではないかと思われる。

またこの尾久地区に艇庫が近接して建設されていく期間が、高等師範学校艇庫建設後の大正10年以降に集中していくのは向島地区が手狭になり新しい用地の確保が困難になってきたことも一因であると思われる。また当時から向島地区の艇庫群で行われていた相互扶助の精神による、ボートレースにおける艇の貸借や役員や試合の準備にも互いの学生が協力していたということを参考にして、建設されたと考えられる。

昭和12年・東京開成中学校	東京市足立区本木町6丁目7065・7066番地
大正8年・静水会(13)	東京市向島区寺島町3丁目31番地
明治40年・早稲田大学	東京市向島区寺島町3丁目31番地
大正3年・慶応義塾大学	東京市向島区寺島町3丁目30番地
大正11年・第一早稲田高等学院	東京市向島区寺島町3丁目
不明・第二早稲田高等学院	東京市向島区寺島町3丁目30番地
明治38年・日本大学	東京市向島区寺島町3丁目18番地
明治40年・明治大学	東京市向島区寺島町3丁目17番地
明治33年・東京外国語大学	東京市向島区寺島町3丁目16番地
大正9年・千葉医科大学	東京市向島区寺島町3丁目16番地
明治45年・大倉高等商業学校	東京市向島区寺島町318
不明・大倉高等商業学校中等科 ⁽¹⁴⁾	東京市向島区寺島町1丁目12番地
明治20年・東京大学	東京市本所区隅田公園
明治39年・一ツ橋大学	東京都本所区隅田公園11
不明・水産講習所 ⁽¹⁵⁾	東京市深川区越中島8番地

図4 昭和13年 隅田川向島・本所・越中島地区の艇庫所在地

さらに日本郵船株式会社や三菱という企業が艇庫を建設したことは、ボート部の卒業生がその企業に就職してボート競技の魅力を伝えたのではないかと思われる。また企業もボート選手の気質の一つである団体主義や、オアーズマンシップが会社の運営上好影響を与えたことを認めていたからではないかと考えられる。

図2の所在地をさらに分けると、寺島地区に艇庫があった12団体（東京開成中学校・静水会・早稲田大学・慶応大学・第一早稲田高等学院・第二早稲田高等学院・日本大学・明治大学・東京外国語大学・千葉医科大学・大倉高等商業学校・大倉高等商業学校中等科）があげられるが、第一早稲田高等学院と第二早稲田高等学院は住所がはっきりと明記されていないため、共同で使用していた可能性も考えられる。

さらに大倉高等商業学校中等科にも艇庫があったと記されているが、東京経済大学端艇部100年史にも記述がなかったため今後の研究を待たなければならない。

上記の12団体のあった寺島地区より下流の長命寺近くに現東京大学と現一ツ橋大学の艇庫があったが、大正12年(1923)の関東大震災で両艇庫も焼失した。

この関東大震災からの復興計画の一環として、近隣は震災復興公園(隅田公園)として整備されたが、両大学の艇庫の所在地に公園とあるのはその名残りであると思われる。また水産講習所の艇庫の所在地が深川区越中島となっているが、この場所は現在東京水産大学と東京商船大学が統合してできた東京海洋大学が存在しているが、その詳細についても明らかではない。

しかしこれら各団体の艇庫所在地が明らかになったことで、明治期から昭和前期までの各ボート部間にあったといわれている濃密な人間関係の一端が、他競技における離れた場所に設置されていた合宿所の関係とは異なり養成されていたと考えられる。

5. ボート部の遠漕^{えんそう}(16)

明治31年(1898年)1月に、はじめて一橋大

学ボート部本科2年生によって向島の艇庫から銚子までの遠漕のための航路が開かれると、明治35年（1902年）12月にふたたび一ツ橋大学が遠漕を行ったが、遠漕の名称には目的地の地名がつけられる場合と単に大利根遠漕と呼ばれる場合があった。

一ツ橋ボート百年によればこの明治31年に行われた銚子遠漕の記録は、以下のとおりである⁽¹⁷⁾。

時期	名称	航路
明治31年1月	銚子遠漕	隅田川～荒川放水路～江戸川～利根運河～利根川

図5 明治31年 一ツ橋大学 銚子遠漕

すると翌明治36年12月早稲田大学ボート部が銚子遠漕の下調べや現地調査をかねて柴又遠漕を行い、12月22日から明治37年1月8日までの銚子遠漕を行い成功させたことによって、他団体の遠漕が盛んにおこなわれるようになっていった。早稲田大学の行った遠漕の記録は以下のとおりである。

時期	名称	航路
明治36年12月	柴又遠漕	枕橋亀屋～柴又の料亭川甚
明治36年12月22日～1月8日	銚子遠漕	1日目22日 向島出発～深川泊 2日目23日 深川～安食泊 3日目24日 安食～津の宮泊 4日目25日 津の宮～銚子旅館大新 25日から1月3日まで大新連泊 1月4日銚子出発 1月6日津の宮出発 1月8日柴又無事柴又着

図6 明治36年 早稲田大学 銚子遠漕

早稲田大学ボート部の創立90周年史⁽¹⁸⁾による銚子遠漕の記録によって、より詳細な記録が明らかになったと思われる。この記録によれば、往路は明治36年12月22日に出発してから銚子の旅館大新までの3泊4日の行程だが、出発まで大新に10日間連泊したことが分かる。早稲田大学ボート部初の遠漕であったため、漕手の疲労回復にかなりの時間が必要であったのではないかと推

察される。また復路は明治37年1月5日と7日の宿泊先が記録されていないのは、往路と同じ地域に宿泊したと思われる。

しかし平成13年（2007）に発行された東京工業大学端艇部100年史⁽¹⁹⁾に、早稲田大学の銚子遠漕が行われた年と同じ明治36年4月に同校初の銚子遠漕が行われた記録を発見した。

時期	名称	月日	航路
明治36年4月4日～9日	銚子遠漕	4日	7時半出発 両国橋下小名木川～江戸川 正午市川着 2時出発 夕方松戸着
		5日	午後9時流山着 旅館山崎屋宿泊 宿賃55銭を36銭に値切る
		6日	7時出発 10時ごろ利根運河到着 通行料特別に無料 堤防上の桜半ばほころぶ 中途水門あり
		7日	
		8日	
		9日	正午ごろ利根川に出る 10時金津江着 9時半出発 12時佐原着 昼食 午後7時半 銚子着 9時飯沼観音前 吉野家泊 10時過ぎ犬吠埼灯台見学 水崎学生主催のヤマサ醤油工場見学 午後4時半 蒸気船通運丸艇と共に乗船し帰路 7時半利根運河入り口着 朝食 9時出発 10時江戸川出る 4時半隅田川帰着

図7 明治36年 東京工業大学 銚子遠漕

この遠漕記録によれば初日に宿泊した流山市の山崎屋は、旅館業を廃業するまでたびたび遠漕時の常宿として利用されていたといわれている。さらに宿泊費を格安で提供したのは、当時の社会が苦学生に対して寛容だったからではないかと思われる。

また銚子の旅館大新でも意気に感じた当時の亭主が、遠漕で訪れるボート選手に対してオールの柄を染め抜いた浴衣を提供したという話が残っているということからも窺えるのではないだろうか。

また利根運河の中頃に在り現在では旅館業を廃業している新川屋にも、遠漕に訪れる学生のために宿泊許可を警察に申請したという話が伝わっている。また昭和39年の東京オリンピック大会の時は、北海道で直前合宿を行った日本選手団が帰路立ち寄り打ち上げを行ったという話も伝わっていた。

さらに茨城県牛堀町で現在も旅館業を営業している千歳屋旅館では、昭和6年に上映された不二映画（栄冠涙あり）の中で主人公がボート部選手で遠漕に訪れた時の宿泊場所として登場しているし、ボートの発着場所としての台船を現在も残しており、又昔のように遠漕に来てほしいと願っていた⁽²⁰⁾。さらに利根運河の通航料が特別に無料になったことから、遠漕にかかわった選手と関係した地域の市民の交流が推察される。

また明治42年（1909年）には一橋大学・早稲田大学・第一高等学校・高等師範学校・明治大学の5校が遠漕を実施し、時には練習形式の競漕を行ったり旅館に同宿するなどの状況が生じていたので、旅館関係者とオアーズマン同士の独特の友情が育まれていったと思われる。

さらに遠漕の航路は銚子以外にも開かれ、短期遠漕としては柴又・松戸・流山・野田、中期遠漕としては茨城県境・潮来などが行われるようになっていった。第二次世界大戦の直前には出征するボート仲間を激励する遠漕が行われたり、卒業記念とする遠漕も行われていた。

このようなボート競技独特の練習方法は、古くから各団体に伝統行事の一環として行われてきたが、その存在はボート競技を体験し遠漕を実施した者や、遠漕に関連した宿泊施設の関係者にしか伝えられてこなかった。また近年明治時代及び大正・昭和前期にボート部を創部した各団体が創部記念誌を発行しているが、各団体の記念誌にのみ記述があるだけで他団体の遠漕にまで関連している記念誌は少ない。そこで本研究では各ボート競技団体が発行した記念誌から遠漕についての記述を集め、ボート遠漕に関する年表を作成し相関関係を明らかにしようと試みたが、残念ながら多くの図書館にもそれらボート部の記念誌はほとんど

寄贈されていなかった。

その原因として考えられるのは、ボート競技を指導しボート競技の父といわれるF・W・ストレンジ氏の出身が英国であったことと無関係ではないと思われる。19世紀のイギリスでは、ジェントルマンとしての立ち居振る舞いを習得するために、パブリックスクールやオックスフォード・ケンブリッジ大学等で行われた集团的スポーツであるクリケット・フットボール・ローイングなどの実践を通して理想的人格形成を計ろうとしたアスレティシズム思想⁽²¹⁾による教育が盛んであり、ストレンジ氏もその影響を多分に受けたと思われるからであり、ストレンジ氏は試合後も相手に対して「ウエル・ロー」・よく漕いだといって、相手をいたわれと教育⁽²²⁾していたからである。

そのような日本のボート選手に対して行われたジェントルマンになるための教育は、当時の近代化を目指していた日本の社会の機運と相まって、ボート選手に紳士としての立ち居振る舞いや自らの行いを積極的に公表することを良しとしないスポーツマン気質として浸透していったと思われるからである。

そこで各団体の記念誌を収集し遠漕の年表を作成し回数を確認した結果、明治31年（1898）から平成19年（2007年）までに146回の遠漕が確認された⁽²³⁾。

この確認された回数以外にも、記録に残っていない遠漕があると思われるのは、大正15年（1926年）の12月までに行われた遠漕が明治大学（春・夏遠漕月不明）、東京大学（時期不明）、一橋大学（7月）東京外国語大学（7月）東京経済大学（7月）、早稲田大学（8月）の6回に上るからである。また明治42年（1909）と明治44年（1911）にもそれぞれ5回の遠漕が行われていることから、記録に残っていない遠漕の存在を推察できる。

6. 海老屋旅館の宿泊人名帳

平成20年（2008）7月に松戸市在住の郷土史研究家の方が保管していた、松戸市で開業していた海老屋旅館の昭和14年（1939）から昭和19年（1944）までの宿泊人名帳の提供を受けさらに

遠漕についての調査が可能となった。

この遠漕時の常宿として知られていた海老屋旅館の宿泊人名帳によれば、1月から12月までの通年にわたり遠漕が行われていたことが分かるが、時期についての偏りは特に見いだせなかった。また記載された記録のほとんどは往路のみの宿泊であることから、復路は利根運河を抜けた後は宿泊費の儉約を図り、江戸川の速い流れに乗り一気に隅田川の艇庫に向かったであろうと推察される。

年代	西暦	回数	特記事項
昭和14年	1939	28回	2月～12月小樽中学 旧制第八高等学校 大正大学（ボート部のあった可能性あり）
昭和15年	1940	36回	1月12月東京帝国大学医学部 三菱銀行端艇部 三菱海上保険端艇部 遠漕歌あり
昭和16年	1941	29回	2月～12月 慶応義塾体育会端艇部 戦勝祈願 大遠漕打倒米英
昭和17年	1942	36回	3月～12月拓大端艇部（現在廃部） 東京商科大学（現一橋大学）卒業記念遠漕 早稲田大学送別件優勝記念大遠漕
昭和18年	1943	23回	2月～12月 境大遠漕 三菱重工 藤原工業大学予科端艇部 慶応義塾送別大遠漕 一橋大学学徒出陣壮行大遠漕 拓殖大学端艇部学徒出陣記念遠漕 早稲田大学学徒錬成部出陣学徒ベア―松戸遠漕 我等徴兵検査を前にして 陛下の赤子としてより強き体力錬成の故をもって 松戸に来る次第なり 皇国臣民 勇士
昭和19年	1944	23回 合計 179回	1月～11月慶応義塾送別遠漕 空襲警報の下 ボートマンの意気 天を突き 早稲田大学建築科出陣記念遠漕

図8 昭和14年～昭和19年までの遠漕回数

したがって宿泊人名帳によれば昭和14年から昭和19年の間に行われた遠漕回数は179回に上り、各記念誌から作成した遠漕年表の回数146回と合計すると325回の遠漕が行われたことが判明した。また他の宿泊人名帳などの資料が発見され

れば、さらに回数は多くなると思われる。

なお昭和14年には、小樽中学校、旧制第八高等学校の校名が見られるのは、この遠漕の存在が国内のボート関係者の間で高まりを見せていたことと、ボート部の卒業生が地方で教職に就き遠漕をボート部員に味あわせたいとして参加させた可能性も考えられる。また当時広く遠漕時などで歌われていた遠漕歌が記載されていたが、江戸川流山付近の流れが急なため、ボート部員は漕ぐ手を休められず「涙流すな流山」と地名を織り込んで歌って士気を鼓舞した様子がかがえる。

昭和16年（1941）11月1日に慶応義塾が記載した記録には、「慶応義塾体育会端艇部戦勝祈願・大遠漕打倒米英」の文字が見られるが、太平洋戦争の真珠湾攻撃が行われた昭和16年（1941年）12月8日未明より約一カ月早いことから、当時の日本国内の社会情勢が開戦もやむなしというものであったのではないかと思われる。したがって昭和17年以降の記録には、送別大遠漕や学徒出陣壮行大遠漕・徴兵検査などの記載が認められるのは、単に卒業記念としての遠漕だけではなく戦場に赴かなくてはならなくなったボート仲間を励ます目的と、戦場に向かうための体力を養成したという目的もあったのではないかと考えられる。

7. まとめ

以上のような既存記録の検証と整理及びボート遠漕の年表作成や、新しい資料の発見により、隅田川に在った各ボート競技団体の艇庫から、銚子や佐原、境方面に向けて、宿泊を伴って行われていた漕艇訓練の内容が明らかにされたといえるだろう。

また各遠漕の時に宿泊した旅館名は銚子の大新旅館を含め合計23個に上るが、現在ではその多くが廃業しているため、より詳細な記録は見当たらない。

今回の宿泊人名帳の中にあった大正大学は現在カヌー部の存在が知られているが、端艇部の存在は知られていない、さらに拓殖大学の端艇部も現在では廃部のため詳細な記録は残されていないため、今後の研究を待たなくてはならない。



図9 昭和6年 利根運河とボート遠漕 日本大学ボート部 力漕100年

注及び引用文献

- (1) 流山市博物館 (1985) : 流山市史, 別巻, 利根運河資料集, 286.
- (2) 宮田勝善 (1976) : ボート百年, 240. 時事通信社
- (3) 古城庸夫 (2009) : 日本におけるボート競技の起源についての考察, 江戸川大学紀要, 情報と社会第19号, 255-265
- (4) 今村嘉雄 (1968) : 学校体育の父・リーランド博士, 61, 不昧堂出版
- (5) 坪井玄道・田中盛業編纂 (1885) : 戸外遊戯法・一名戸外運動法, 第21
- (6) 固定席艇(フィックス艇) 当時は漕手の座るシートが滑席使用ではなく固定されており板に腰掛けており状態のみで漕ぐ動作をした
- (7) 走舸組
明治16年(1883年)頃, ボートを漕いでいた学生達によって, 多くのクラブが生まれたが, 代表的なものは以下の三つである。その後全クラブの統合機関とし

て生まれたのが, 走舸組である。

- *MBC (Member of Boat Club) 代表 日高真実 山口鋭之助(学習院長・宮中顧問官) 林権助(駐英大使・宮内省御用係) 他
- *ORC (Oriental Rowing Club) 武田千代三郎(県知事・大日本体育協会副会長) 神崎東蔵(弁護士) 他
- *SRC (Sumida Rowing Club) 岸清一(日本漕艇協会会長・大日本体育協会会長・IOC委員) 他
- (8) 古城庸夫 (2008) : 利根運河とボート遠漕, レジャー・レクリエーション研究第61号, 60-63
- (9) 大日本体育協会
武田千代三郎・岸清一・杉村陽太郎(国際連盟事務局長・フランス大使・IOC委員・一高, 東京帝国大学のボート選手) などボート関係者が多く在籍していた。
- (10) oarsmanship
oarとはボート競技のオールのこと, 漕手としての技量全般を指しスポーツマンシップに繋がるとされる。
- (11) 部史編纂実行委員会 (2009) : 学習院輔仁会漕艇部の歩み, 53

艇庫の増築、艇庫完成後に学習院コーチの井口常雄教授や水上部員（学習院大学ではボート部のことを水上部と称した）と度々、艇庫からスカル漕（1人漕ぎのボート）を楽しんでいた秩父宮殿下と高松宮殿下より御下賜金をいただき、本艇庫裏側に隣接して16坪位のスカル専用艇庫が建造された。ここに宮様の艇を始め井口教授や水上部先輩の艇を納めた。この艇庫拠点を（ウラノクラブ）と名づけ、井口教授や堀越三郎助教授、渡辺八郎、鈴木正亮などこのクラブ名で全日本に出漕（出場）して実績を残している。一部略、増築艇庫は学習院漕艇関係者が中心となった卒業生と社会人の本院最初のローイングクラブとしての活動拠点となった。

(12) 財界評論新社（1980）：東京教育大学百年，29

(13) 東京海上火災保険ボート部

(14) 東京経済大学

(15) 東京水産大学、後に東京商船大学と統合し現東京海洋大学

(16) 遠漕（えんそう）古くからボート競技を行う各団体に伝わる練習方法。宿泊を伴い数泊の宿泊を行いながら、最終目的地の銚子まで向島～小名木運河～江戸川～利根運河～利根川～銚子と漕艇訓練を行う。往復で行う場合や松戸までの遠漕や茨城県境町あるいは潮来までの航路も各団体により存在する。

また利根運河が渇水で通れない場合は関宿を経由する方法もある。

(17) 四神会（1983）：一橋ボート百年の歩み，四神会

(18) 早稲田大学漕艇部（1992）：早稲田大学漕艇部創立90年史，90周年編集委員会

(19) 蔵前漕艇倶楽部（2007）：東京工業大学端艇部100年史，日経事業出版社

(20) 古城庸夫（2008）：現地聞き取り調査

(21) 古城庸夫（2010）：昭和15年東京オリンピック招致活動成功についての研究，江戸川大学紀要，第20号，77.

(22) 宮田勝善（1976）：ボート百年，324.時事通信社

(23) 日本大学保健体育審議会ボート部（2005）：力漕100年，30 日本大学ボート部

久保勘三郎（1936）：東京帝国大学漕艇部五十年史，東京帝国大学漕艇部

稲門艇友会（2002）：漕艇部の百年 早稲田ボート文化史，100年史編纂委員会

東京外語艇友会（2001）：外語ボート100年，東京外語艇友会

三田漕艇倶楽部（1980）：百年のあゆみ，慶応義塾体育会端艇部

明治大学大学端艇部編（2004）：明治大学体育会端艇部百年史，明治大学端艇部実行委員会